

坂本城

を
考
え
る
会
ニ
ュ
ー
ス

坂本城を考える会発行
発行責任者 天田 省三
大阪市下阪本 5丁目10-6

福知山城訪問・文化祭参加 坂本城趾公園清掃など



会の事業として、六月二十一日と十月十八日に坂本城趾公園の清掃作業を行いました。両日とも十五名ばかりの会員が参加して頂きました

会も着実前進 天田省三会長抱負を語る

また、十月二十九日にはバス一台で福知山城と亀山城址を訪れ、大変有意義な研修旅行となりました。さらに、十月三十一日と

バス見学などに参加

大津市 山岡 豊夫

光秀ゆかりの地である福知山城と亀山城址のバス見学が、秋晴れと紅葉に恵まれた十月二十九日に行なわれました。当日の参加者は三十四名となり、席もゆつたりと座れ、自己紹介や歴史解説も入り、予定の十一時

に福知山城へ到着しました。市観光振興課を通じてのボランティアガイド・塩見様の出迎えを受け、石積み説明、三層四階の天守閣部位や展示品の説明を受けました。この城は、市民たちの浄財寄附により昭和六十一年に郷土資料館として整備されたものです。その後、市内のたかた荘で昼食

をとり、亀山城址に向かいました。

十一月一日に、地元下阪本学区の文化祭に参加し、私たちの活動状況の展示を行いました。カラオケ会では私も勇気を出して「男（光秀）の意地」を唄い、坂本城を考える会のPRをしました。それぞれの役員が、担当の役割をしっかりと実行して頂いたお陰で、事業も着実に前進していることに感謝し、会員の皆様の更なる参加とご協力をお願い申し上げます。

バス内ではビデオ披露やカラオケ教室、歌謡披露など、大変なごやかな雰囲気に満たされた楽しい一日でした。次年度の企画を楽しみにしております。



がんばれ坂本城

大津市 山本きよ子

一番最初、天田会長にお会いさせて頂いたのが老人会の新年会の時でした。坂本城のお話を聞き、結構なお話だと意気統合して、お

話がすみませんでした。でもよく考えたら、土地の確保や莫大なお金、それを思うとなかなかむづかしい、生やさしい事ではないと思いま

一生懸命

した。夢の様な大事業でも、会長さんは一生懸命、その熱意にほだされ、私も何とか間に合う事が出来たらと、心より応援しています。何をしても始めは反対が多く、引き込んでしまえようですが、天田会長さんは何を言われてもめげず、気にもせず、唯ひたすら私利私欲を捨て、一生懸命会員を増やしたり、講演会を開いたりしておられるのには、感服いたしております。



先日になりますが、坂本城の石垣はどこかとたずねられました。あのちよつとした石垣なのに遠方から見学にこられたと言うことは、小さな格好のお城ができたら、どんなに多くの観光の方々が来られるのかと思うと、

一日も早く築城を願わずにはおられません。そして同時に、経済効果も計り知れないものがあると思います。どうか会長さん始め役員の方々、これからは本番大変なことと存じますが、心より応援しております。

明智光秀と坂本城への 熱き思い

大津市市瀬論

毎年、初夏になると、西教寺ユースホステルで壮年合宿がある。西教寺は明智光秀の菩提寺で、妻やその一族のお墓が安置されている。

比叡山焼き討ちの際、一度焼失したが、その後坂本城主となった光秀が西教寺の復興に尽力したとされる。また、妻の瀧子は光秀が仕官を求めて流浪するという多難な時に自分の黒髪を売って、夫を助けたとも言われ、光秀もまた、瀧子存命中

は一人の側室もおかずに大切に、鉄砲の名手として知られる一方で、連歌を嗜み、茶の道に精進する教養人であったとされている。その子供が後の有名な細川ガラシャである。

近江国随一の華麗な水城だったとされる坂本城も、今は偲ぶことはできないのが残念であるが、宣教師のルイス・フロイスは著書『日本史』の中で豪壮華麗で安土城に次ぐ名城と記されている『坂本城』とはどのような城だったのだろうか。

インターネットで検索すると坂本城とは、大津市側の比叡山の麓にあり、東側は琵琶湖に面していることから、天然の要害を具えた地であったとされている。また、西教寺総門は坂本城城門を移築したもので、鐘楼堂の鐘は陣鐘と説明されていた。また、坂本城内に琵琶湖の水を引き入れており、城内から直接船に乗り込み、そのまま琵琶湖に乗り出せる「水城」形式の城であったと思われる。

私は、平成六年の琵琶湖大渇水の時、水質調査を実施していたが、猛暑のために水位が百五十七センチメートルも下がり、水面下のあった湖底が露出し、湖岸部は水質調査船が航行出来なかつたことを記憶している。その結果、湖北の長浜城の井戸や、坂本城の土台の遺構が水面から何百年ぶりに現れたとされている。

明智光秀は、主君の織田信長を打ち滅ぼしたために、三日天下の謀反人として歴史に名を残すことになったが、一方で光秀の夫婦愛的な心情や茶の湯の嗜み、鉄砲の名手で、連歌の座を好み、西教寺の復興にかける並々ならぬ信心深さには心打たれるものがある。

西教寺での天田会長のご縁から、地元の町おこし運動の一環として「坂本城を考える会」の存在を知った。身近な講演活動や坂本城址公園の清掃活動といった地道な実践を通して、多くの人々にも、光秀の生き様や大津市坂本に豪壮華麗で安土城に次ぐような名城があったことを語り繋げて



頂きたいと思う。さらに、琵琶湖にせり出し、船で乗り出せる構造の水城を、水質調査のおりにでも、琵琶湖側から比叡山の山並みを

背景に観てみたいものである。謎の多い坂本城を通し、この坂本の地が滋賀観光の一大スポットとなることを夢見るものである。

雄大な男のロマン 実現へ 大津市 江川敬

会長の天田省三さんとの

出会いはいつごろだったのでしょうか？既に何年か経ってしまっていますが、それは天田さんが元滋賀県知事の武村正義さんとの関係を築かれたところで、私も学ばせて頂いています。朝起会でありました。

天田さんは朝起会の会友さんのお誘いで集い始めて

居られました。

当初から「坂本城を考える会」のことを私たちにお話してくださり、その熱意には感心させられていました。

故郷を、地元を何とか活気ある町にしたいとの郷土愛でもありましょうか、ご自身には何の利益も無いでしょうこの運動。ご自身、家で栽培した野菜を売られて運動資金とされています。だからこそ純粋な天田さんの気持ちがちがこちらに伝わって来るのです。



今や、「考える会」の会員も少しずつ増え続け、地元自治会にも話をされ、市の方にも陳

情されたとか、その熱意は人々の中に広がりつつあるようで私自身も一会員として嬉しく思わせて頂いています。

最近では戦国武将ブームとかで若い女性にも人気のある武将も多いようですが、果たして明智光秀はどうなのでありましょうか。

詳しいことは解りませんが謀反の武将とのイメージが強い光秀も最近は見直されてきたとのこと、追い風ということでしょうか。

そうは言っても「会」の最終目的・目標はかなり遠大なものと思われまます。簡単でないからこそ、やりがいのあることでそこに「男の雄大なロマン」があるのでないでしょうか。

「ロマン」とはいろいろな解釈があるでしょう。理想を求めて努力する。一歩一歩踏みしみて前進する・ある地点にたどり着き、頑張ったなと思ひ、ある達成感を味わい「しあわせ」を感じる。しかし最終目的は、未だ先の方にある。そしてそ

こから、又、新たな前進を始める。挫けず、この繰り返しを継続する。「男のロマンたる」所為でありましようか。

お一人で始められたこの事業、今や、池に投じた一個の石が大きな波紋を広げた状態ともいえましよう。

朝起会も己の人格を高めつつ「理想の社会建設というロマンを」目指しています。「考える会」との共通部分もあり、共感するところも多々あります。

お互い熱い心でロマンを、夢を実現すべく頑張つて生きたいものでございます。

坂本城の復興を 湖南省 信原潤一郎

陋屋の書斎で瞑想にふける私の耳に、とつぜん陣鉦や法螺の音響、種子ヶ島の発砲音に混じって、喊声の震動が聞こえてきた。

「左馬介を坂本城へ入れるな。討ち取れ！」

大声で命令をくださるのは秀吉軍に属し、大津を準備する堀 秀政である。

左馬介というのは明智光春(秀満)であった。彼は明智軍の重鎮で、妻は光秀の娘であり、占拠した安土城を守っていた。

天正十年六月十三日。一万七千の光秀軍が、二万三

千の秀吉軍と攝津山崎で戦つて敗れ、光秀は坂本城をめざす途中、小栗栖で土民の竹槍に倒れた。

辞世には「順逆に二両なし、大道は心源に徹す、十五年の夢、覚め来れば一元に帰す」とあった。たとえ信長は討つたが、順逆を問われる謂われはない。彼も我も同じ武門ではないか。わが心を知るのは、自分の深い思いを知つたものだけだ。とはいえ五十五年の夢が醒めてみれば、自分も世俗の毀誉になつていよう。と訳すのだろうか。

六月十五日。光春は主君光秀の非業な最期と、京滋の拠点が全滅したのを知ると、数百の兵を率いて安土を出た。目標は坂本城である。

湖南の途を粟津へと辿ると、やがて大津の町があり、道は三叉点となっていく、まっすぐに逢坂へ伸びる坂道、西は三井寺、北へと進めば茶ヶ崎の浜辺となる。

堀秀政は二千余の兵で三叉路の辻を固め、地形も坂の上になっていたので、戦闘には最初から優位だった。辿ってきた光春勢は待ち受けていた堀勢と敢闘を



展開した。だが多勢に寡勢光春勢は次々と討ち死を遂げて潰滅していったが、その中に光春の姿はなかった。「逃げ失せたぞ!」「どこへ行ったのか!」

光春を探す堀勢たちの疑問は、まもなく判明し、愕然となった。

二丁ほど離れた湖岸べりへと馬を走らせ、水しぶきを上げて湖面へ馬を乗り入れた武者があった。光春である。すでに矢も種子ヶ島も届く距離ではなかった。

ひとり重囲を脱した光春には、大きな使命と責任があった。一族がみな四散し

た今、明智を統べるものは、彼一人であった。坂本城には光秀の妻子、叔父叔母、彼の妻子、一族郎党がいた。すでに光秀亡く、諸拠点も敵手に陥ちた今、残されたものは武門に生きたものとしての、いさぎよい死であった。

陸地の堀勢は湖上を行く光春の姿を眺め、「今におぼれてしまいうだらう」と囁し合うのを尻目に、光春は湖に浮かぶ水鳥のごとく、湖心を渡っていく。光春は水馬の名手であった。坂本と大津間の湖上へは、何十回となく馬を乗り入れていた。今日の馬は選りすぐった大鹿毛であったが、安土からの長駆と戦場を疾駆して相当に疲れていた。そのうえ光春は完全武装である。紺糸織の具足に二の谷と銘打った明珍製の兜、白絹の陣羽織には墨で雲竜が描かれていた。その重さも常時を逸していた。彼は彼方に坂本城が見えてくると、馬を渚へと操り、白砂青松の群がる唐崎の浜へ上がった。ひととき古い一の松に金履輪の鞍のままの大鹿毛をつなぎ「よくもここまで乗せてくれたが、ここで別れよう。よい武將に拾われてくれよ」と馬首を抱いて愛馬と訣別した。光春が坂本城へはいったときは、負け戦を知った多くの兵は逃散し

ていたが、三百ほどの將兵が残っていた。彼はそれらを本丸の一室に集め、城内の金銀を分け与えて搦手から比叡山越しに落としした。どうしても主張する百人余の城兵を指図して、押し寄せてきた秀吉軍と抗戦した。その前に光春は坂本城の城壁の狭間に立ち、大音声で寄せ手の堀秀政を呼んだ。「お渡しする物がある。なき主人光秀が信長公から拝領した秘蔵の名画墨蹟、数々の茶道具や重器、太刀等は天下の名品で後世に伝えるもの。それを戦闘で滅失させるのは惜しいので、受け取ってほしい」と言うと、狭間から薙に包んだ荷梱を細曳きからめ、地上へとおろした。「貴殿のご遺志は篤と承った。後世に伝えるよう主君秀吉に申告します」と堀秀政は承諾した。それを見届けると光春は最後の火蓋を切った。攻防半刻、明智一族の最期が来た。坂本城は紅蓮の炎に包まれていった。

古来から、後世の人々の心を搏つ日本武士の姿は、楠公父子の桜井の別れから湊川、四条畷、高松城の清水宗治、関が原の石田三成、松坂町の赤穂浪士の討入り、西郷隆盛の最期と、枚挙に暇はないが、私はいつも琵琶湖を見るとき、明智一族の栄枯を偲び、さらに悲壮な最期を歴史絵巻の一ページに加えながら、一掬の涙を禁じ得ない。日本歴史に冠たる足跡を残す明智光秀を偲びつつ、坂本城趾にたえずめば一基の碑だけでは、余りにもわびしい。心ある人々によって一日も早く、坂本城復興が成りますよう、心から待ち望んでいる。

